

フランク・ジャクソンの知識論証について

井上 裕美子

私たちは、心というものを非常に身近に感じて生活しているし、心という言葉を日常的に使っている。しかし、いざ心とは何かと考えると明確な答えを出すことができないように思える。哲学の中には、心とは何かと考える心の哲学というものがある。私は、こんなにも身近にあるものであるにもかかわらず、心とは何かと考えると明確なことが分らないということで心の哲学に興味を持ち、その中でも心の哲学の代表的な議論である知識論証というものに興味を持った。

知識論証とはフランク・ジャクソンという哲学者が物理主義に反論するために提示したもので、クオリア（意識に現れる質的な感じ）について議論したものである。ジャクソンは知識論証を行う際にマリーの部屋という思考実験を提示した。ジャクソンが批判した物理主義とは、世界に存在するものはすべて、その性質や構造などを物理学で説明できるという考えである。はじめは物理主義を批判していたジャクソンは後に考えを変え、今では物理主義者になったことを表明している。本論文では、物理主義者になった改心後のジャクソンの議論を取り上げ、改心後のジャクソンの知識論証に対する批判で物理主義を擁護できるかどうか考察した。

そのために、まず、心の哲学全体について理解することを目的として、心の哲学全体像をまとめた。次に、本論文で焦点をあてたジャクソンが提示したマリーの部屋について説明し、その後、考えを変えた改心後のジャクソンの考えについて次のように解説した。

ジャクソンは、知識論証に対する批判において表象主義という考えを用いた。表象主義とは、私たちの経験も世界のあり方を表すという点で一種の表象であるという考えである。ジャクソンはこの表象主義に基づき、ジャクソン自身がもともとは物理学的には説明できないと主張したクオリアが物理学的に説明できるとした。ジャクソンによれば、その根拠はクオリアが表象内容の一部に含まれ、表象内容は物理学的に説明できるので、その表象内容に含まれるクオリアも物理学的に説明できるということである。

それから、ジャクソンの改心後の考えに反論する意見として、表象主義の真偽と知識論証の是非が無関係であるという意見と、心的状態は非表象的性質ももち、表象主義では知識論証の反論にはならないという意見の二つを説明した。

最後に、考察では、まず、ジャクソンが提示した、クオリアは表象内容の一部に含まれるという考えが納得のいくものではないことを示した。さらに、そもそもジャクソンが用いた経験を一種の表象として理解する表象主義という考えに無理が生じることを指摘した。そして、ジャクソンの知識論証に対する批判では物理主義を擁護できないことを示した。

（指導教員 横山幹子）